

痛妻

安達元一 著

(2009 年刊)

公開版

勅使河原比呂志、32 歳。大手芸能プロダクションのチーフマネージャーとして将来を嘱望される彼には、ただ一つの悩みがあった。それは最愛の妻・鏡子の異常なまでの嫉妬心。昼夜をわかたず、あらゆる手段で比呂志の素行を監視し、粗相が見つかれば空恐ろしいお仕置きを科すのだ。そんな比呂志の目下の夢は、類い希な才能に恵まれた明日香を超一流の女優に育てること。ところが、些細な出来事から始まったプロダクション社長と明日香の口喧嘩が、芸能界を震撼させる大騒動へ発展。老獪な伝説の女優、芸能界の黒幕…魑魅魍魎の蠢く事態に、ついに「痛妻」が立ち上がる—。

勅使河原比呂志は正座をしています。きっちり結んだ口、握って腿に置いた手、目は正面を見られません。悪さをした仔犬のようにうつむいて小さく丸まっています。身長181cm、体重86kgの体がここまで小さくなるのかと思うくらいです。「恐縮」という言葉を体で表すと、きっとこんな形になるのでしょうか。決して美形ではありませんが、誰からも好かれる比呂志の好感度マスクが、この時ばかりは、眉毛も垂れて、口元もへの字、情けなさを全力で表現しているようです。

つい先程までは、爽やかな一日の始まりでした。朝食を終え、情報番組の画面に映る時計に追われるように支度を調べ、プレスの効いたソフトスーツで颯爽と家を出ようとする瞬間に、この悪夢が始まったのです。正座でズボンはまだ皺だらけです。フローリングの床に敷かれた白いモヘアのラグ、その柔らかな上に座ればまだ良かったのでしょうか

——それ、どかして床にね。

冷たく言い放たれた一言で、板の上に直正座です。足が痛いです。

この家は比呂志が32年の人生でやっと手に

入れた男の城です。多摩川ギリギリの立地とはいえ、腐っても世田谷区の一戸建て。それは19坪という猫の額、いや鼠の額のような土地です。価格3980万円のうち、まだローンは3000万円以上も残っているような家です。でも一国一城の主がこれほど小さくなる必要はあるのでしょうか。

「あ、またいたわねえ……冴木萌」

目の前では、妻の勅使河原鏡子がファッション雑誌をめくっています、片手に持ったハサミが眩く朝日を反射しています。冴木萌は、最近人気のファッションモデルです。

——卵は？ 遅れそうだから目玉焼きで良い？

そんな暖かい言葉をかけられた15分前が夢のようです。

もう抵抗の出来ない獲物を弄ぶライオンのように、寝間着のアバクロスエットのままで鏡子は、薄笑いさえ浮かべて雑誌をめくっています。

それは好きあって結婚した仲、もう3年経つとはいえ、1歳年上の33歳とはいえ、比呂志は鏡子が好きです。もちろん顔も好きです。母親が沖縄生まれと言うことで、鏡子の人なつこい、良い意味でバタ臭い顔が好きです。化粧のない朝の顔

も好きです。でも加虐のスイッチが入った今の鏡子の顔は比呂志は苦手です。怒りだけならまだしも、そこには喜びと恍惚が微妙に混じっているからです

「冴木萌……たくさん出てるわね、ここにも」

彼女が出ている雑誌のページを見つけては、鏡子はハサミで切り抜いていきます。目の前には、大小30枚ほどの冴木萌が積み上げられています。

「貴方！」

ハサミの先端が比呂志の鼻先に突きつけられます。

「なんて言ったっけさっき、もう一回言ってみて」

10分前、テレビを見ながらの比呂志の失言を、こうして執拗に責めあげているのです。

——またCM、冴木萌だよ。良いよなあ、やっぱり可愛いよな。

思わず口をついて出た時には、もう後の祭りでした。背後に鏡子が腕を組んで仁王立ちしていました。冷酷でいて、しかし楽しいオモチャを見つけたような目で見下ろしていました。そこから家中の雑誌をひっくり返して『冴木萌狩り』が始まったのです。

「まあ、こんなもんかな」

テーブルの上で、切り抜きが小さな山を作っています。

「冴木萌って良いの？」

「いいえ」

「冴木萌って可愛いなの？」

「いいえ」

「じゃあ、可愛いのは誰？」

瞬時、返答に詰まる比呂志を、間髪入れず追い詰めます。

「誰っ？」

「鏡子」

そう答えるしかありません。そんな比呂志を見て、鏡子の口元がニヤリと上がります。

「可愛いのは誰？」

「鏡子」

「さん！」

「鏡子さんです」

「可愛いのは誰？」

「鏡子さんです」

「可愛いのは誰？」

「鏡子さんです」

有無を言わせぬ体育会系の口調です。

「じゃあ、まとめましょう。いい？……冴木萌

は？」

「可愛くない」

「鏡子さんは？」

「可愛いです」

妙な節に乗せて、もう暗示、もしくは催眠です。

「冴木萌は？」

「可愛くない」

「鏡子さんは？」

「可愛いです」

「冴木萌は？」

「可愛くない」

「鏡子さんは？」

「可愛いです」

「はい、じゃあ火をつけて」

鏡子が、冴木萌の切り抜きを灰皿に乗せます。比呂志はもう、なんでも言うことを聞くマリオネット、指示通りにライターで火をつけます。

朝の日差しに、白い煙が揺らめきます。冴木萌の笑顔が、炎に包まれ昇華してゆきます。小さくうずくまる比呂志、勝ち誇ったような愉悅の微笑みの鏡子、

「はい、じゃあ今日も稼いできて」

「行って参ります」

トボトボと玄関に向かう比呂志です。その背中

に鏡子の声、

「帰りに、卵と牛乳を買うの忘れないでね」

もう、何も言い返すことは出来ません。服従するしかありません。なぜなら鏡子は、史上最強の痛い妻「痛妻」なのだからです。

2

「お早う比呂志。大東テレビの新番は？ タレント押し込めた？」

50代のメタボ盛りというのにブルージーンズ姿、たっぷりと出たお腹に押されベルトのバックルは、もう前と言うよりは下を向いてます。更にポロシャツの襟を立てるという古いスタイルで、上司である部長の山田太士が比呂志の肩を揉んできます。何やら気持ちの悪い揉み方なのですが、立場上、邪険に払うことも出来ません。山田に言わせると、肩を揉むというのは、相手を服従の気分にさせるこの業界での高等挨拶テクニクだそうです。

「はい、なんとか……セミレギュラーですけど、近いうちにレギュラーに昇格させますよ」

「いいねえ比呂志ちゃん、どんな手使ったの？」

更に、機嫌良さそうに肩を揉んできます。

「いや、あの番組の木下プロデューサーには、ゴルフに連れて行って頂いたりして、可愛がってもらっているのよ」

「木下ちゃんね、フーゴル好きだもんね」

フーゴルとはゴルフのことです。そこまで言って、山田が耳元に口を近づけます、仁丹臭い息が比呂志の耳にかかります。

「ズブズブにしちゃって、枕させてもいいよ」

「部長、そういうの良くないですよ」

立ち上がって、比呂志は少し声を荒げてしまいます。

「おおくわばら、くわばら。熱血漢くん、まあ、頑張ってるねえ」

肩をすくめて、山田は気持ち悪く去って行きます。

「ズブズブ」とは、飲食の接待などで頼み事を断れないようにしておくこと。「枕」とはタレントに夜のお供をさせて仕事を取らせること。この時代に滅多にそんなことはないのですが、この生ける業界伝説である山田は、冗談交じりでいつもこの調子なのです。まあ、こういうことを言うと、ムキになって反論する比呂志が面白くてわざとやっている節もあるのですが。

山田はもう、何食わぬ顔で席に着き、鼻毛を抜

きながら朝から雑誌のヌードグラビアをめくっています。それを比呂志がとがめるような視線で見ていると、

「これ仕事だからね、お前も他の事務所のタレントチェックしておけよ」

古いタイプの業界人です。

西新宿にある、排気ガスで汚れた5階建ての自社ビル。すっかり高層ビル群に見下ろされるようになりましたが、テレビ芸能の歴史はここから作られてきたと言っても過言でない場所です。

ここ「オーエスプロダクション」はテレビ創世記からの草分け的存在の芸能プロです。1950年代、まだ映画が主流で、新しく出来たテレビなんて媒体は誰が見るんだ、一流の俳優は映画以外には出ない、テレビになんて出ると価値が下がる、といわれていた時代がありました。そんな時代に、もともと祭りや縁日での大道芸人の興業をやっていた「沖本興業」の創業者、沖本慎一郎がいち早くテレビの将来性を見抜き、それに芸人を次々と出演させるプロダクションを始めたのです。そして後に改名し、沖本慎一郎の頭文字を取って、現在の「オーエスプロ」に至るわけです。

今でこそ、様々な芸能プロが群雄割拠ですが、オーエスプロはまだまだ老舗の力を誇っています

す。場所柄、ビルの1階はコンビニエンスストアを店子に入れていますが、上の4フロアでは足りないくらいの事業規模です。

2階は「第一芸能部」と「第二芸能部」。

第一芸能部は、バラエティータレントの担当、もともと数々のテレビタレントを育ててきたオーエスプロの主力部隊です。最古参であり会社の取締役でもある山田が部長で、比呂志はこのチーフマネジャーを務めています。新人から大御所まで、所属タレントは30人以上です。中でも脂がのっている30代後半の芸人コンビ、「ミッドタウン」と「最終決戦」は稼ぎ頭です。ミッドタウンはゴールデンで看板番組を2本、深夜番組を3本、最終決戦はゴールデンを1本、深夜を4本持っています。彼らがメインを張るそれらの番組に、ゲストや、コメンテーターでオーエスプロのタレントをキャスティングし、そこで次の人気者を生んでいくという良いスパイラルにはまっています。そして、ミッドタウン、最終決戦をデビュー当時から面倒見てきた比呂志は、社内でも一目置かれ、2年前から第一芸能部のチーフを任されるようになったのです。そして、現在は第一芸能部の中で、新人のお笑いや、グラビアアイドルなど十数人を担当し、各局の色々な番組にキャス

ティングしてもらえるように営業活動をする、この会社の将来を担う重要な仕事を任されているのです。

第二芸能部は、第一芸能部に続きオーエスプロの屋台骨を支える、俳優を担当する部署です。看板である「結城彩名」は各局ゴールデンドラマ枠で、奪い合いが起こっている売れっ子女優です。2年先、向こう8作品まで主演が内々で決まっており、そろそろテレビドラマを卒業させて、映画の世界に殴り込もうかという逸材です。しかし、この結城を卒業させる前に、次なる主力テレビ女優を育てなくてはならないという、大変な課題を、現社長から与えられている部署でもあるのです。

3階は「第三芸能部」と「第四芸能部」。

第三芸能部は文化人担当です。大学教授、小説家、スポーツ選手、医者、弁護士など、それぞれが所属する団体とは別に、芸能活動をするときの窓口として契約をしています。なかなか素人さんにはわかりづらい芸能界の仕組みである、キャスティング、現場のアテンド、スタッフとの交渉、ギャラの請求などを代行する代わりに、彼らが芸能活動から稼ぎ出すお金の50%を頂くという契約です。ちなみにこの50%というのは、どのタレントプロダクションもほぼ同じような数字

です。

余談になりますが、芸能プロダクションのお金の話をしますと、第一芸能部のテレビタレントや、俳優は基本的には給料制です。仕事をして、しなくても月額固定のギャラを支払います。少ない人は数万円、多い人で150万円、毎月固定で出て行きます。だからスケジュール帳が真っ黒になるまでドンドンと働かせて、月給以上のギャラを、テレビ局から頂かないと芸能プロダクションとしてはやっていけないわけです。ちなみに、売れっ子になるとプロダクションとしては歓迎は出来ないので、通例として歩合制に変更になります。これを拒むと、移籍や、独立話が出て面倒になりますし、歩合制を認めるのが芸能界の暗黙のルールなのです。こうなると、プロダクションが2割、タレントが8割など、ケースバイケースですが割合が決まり、年収数億円という信じられない金額を手にするスターが誕生するわけです。

話が横にそれましたが、オーエスプロダクション3階の第四芸能部は近年出来た小さな部署です。声優やナレーターを担当しています。こうした、声だけの仕事もアニメブームに乗って少なくない利益を会社にもたらせてくれます。

4階は「事業部」「出版部」「モバイル部」。

所属タレントのテレビ、映画などの仕事と連動し、舞台化したり、イベント化したり、写真集を出したり、エッセイや私小説を書かせたり、着メロや待ち受け画面を作ったり……権利ビジネスを展開する部署です。最近では、テレビ界でも番組外収入、二次展開、ワンソフトマルチユースといった考え方が叫ばれるようになり、急成長の部署です。

そして5階は「社長室」。

全てを掌握するオーエスプロの首領、カリフォルニア大学でMBA取得の35歳。父親である創業社長の沖本慎一郎の勇退で、会社を譲り受けた二代目社長、芸能界の革命児と呼ばれる「沖本誠也」の城です。

そして今、そこから彼が下りてきて2階のフロアで檄を飛ばしています。ノーフレームの眼鏡、仕立ての良いスーツ、オールバックの髪、いかにもエリートビジネスマンを絵に描いたような二代目社長の御機嫌は、今日も良くないようです。

「ですから、青山のアカデミーの開校は絶対に来月、4月に間に合わせてください。一ヶ月でも物件を遊ばせないでください。貴方たち全員の月給より多い額の賃料が無駄になります、遅れた場合は、なんなら給料と相殺で処理して差し上げても

構いませんよ」

オーエスプロは、今年からアカデミーを開校します。お笑いコース、俳優コース、放送作家コース、ディレクターコースの4コース、それぞれ定員が50人という大規模なスクールです。講師は横のつながりで各業界で活躍するトップを招聘しています。大手芸能プロダクションは既に参入している分野で、オーエスプロとしては後発になるのですが、社長の鶴の一声で半年前から準備していた新事業です。しかし、事業部では計200人の生徒が集まらずに苦戦しているようです。

「いいですか、これは業務命令ですから面倒とか言わせないでください。ミッドタウン、最終決戦、結城彩名には月に一コマで良いから講師をさせてください。これを広告塔にして生徒を一気に集めます」

確かに社長にしてみれば、ここまで気合いが入るのもわかります。半年コースで授業料は40万円、200人集まれば8000万円、年間にして1億6千万円の売り上げ、なかなか良いビジネスです。

でも、比呂志の顔は少し曇ります。ミッドタウン、最終決戦、芸人にとっては何事も勉強、講師をするのも良いでしょう。しかし結城彩名にとっ

てはマイナスになるのではないかと心配しているのです。彼女の女優としてのカリスマ性、神秘性は、第二芸能部の一同が心血をあげて作り上げた物です。本来の彼女は、冗談好きで、笑い上戸で、どこにでもいる女性です。生徒達の目の前に、台本もなく立たせるのは、如何なものかと疑問に思わざるを得ないのです。

「このフロアにいる大学を卒業されていない方でもおわかりと思いますが、芸能プロダクションは企業です。大切なのは収益です。親父の代とは違います。3年かけてここまできた改革をあと2年で仕上げます。2年以内にこの会社を上場してみせます」

一部の若手から拍手が起こります。比呂志達が密かに「誠也チルドレン」と呼んでいる、沖本誠也が社長の席に着いてから入社した新人組です。

「芸能はそういう事じゃないんだよ、若僧が」

仁丹をガリガリ噛みながら、部長の山田が小声で囁きます。比呂志もそれには何か共感できる部分があるのです。芸能プロダクションが株式上場することがそんなに大切なのでしょうか。確かに、ストックオプションで比呂志達も臨時ボーナスになります。が、そもそもお金を儲けるために芸能界に入ったのではないと思うのです。確かに給料

は安いより高い方が良いに決まっています。所属の芸人達も、俳優達も高いギャラをもらえれば良いと思います。でも古臭いことを言う気はないですが「芸事」なのです。芸能界は芸を魅せる世界です。お笑い、俳優、文化人、声優、それぞれ表現の仕方は違えど、一般の人にはない「才能」を磨いて光らせ、人々を魅了するのが、この世界の夢なのではないでしょうか。それを、芸能の世界には余り興味がなく、高校からアメリカに留学しMBAを取得した社長は、オーエスプロを単なる企業経営としか見ていない節があるのです。何か違うのではないか、そんな空気が比呂志を始め、昔からの社員の中にはそこはかたなく漂うここ数年なのです。

「さあ、今月もあと少し、売り上げ目標に達しない部署は頑張ってくださいね。もう、お辞めになりたいという方は除いて」

アメリカ帰りのMBA社長が演説を終えドア消えようとしみます。と、そのドアがバタンと開き、そこに最悪の人物が立っているのです。

「やばい」

比呂志と部長の山田が顔を見合わせます。

そこに立っているのは、明日香です。神の悪戯か、悪魔の微笑みか、あの明日香が、社長の前に

立っているのです。

「明日香」

比呂志が制止する前に、栗毛色の長い髪をかき上げ、キッと社長を見つめ、もう彼女は言っていました。

「社長、私、あの芝居やりますから」

身長158センチの体が、180センチの社長の前で全く小ささを感じさせません。幼さと妖艶さが同居したような瓜実顔、その顔の大きな部分を占めるアーモンド型の目、長い睫の下で磁力を発する様なその瞳に見据えられたら、比呂志もつい目を逸らしてしまうのですが、MBA社長もただ者ではありませんでした。明日香の眼光を真っ向からうけて、ゆっくりと眼鏡を外し冷たい目で明日香を見下ろします。暗くて冷たい目です。

明日香も決して視線を外しません。

「社長がなんと言っても、絶対にやりますから」

明日香の決意が、部屋の空気を震わせました。

明日香と比呂志が初めて会ったのは2年前、渋谷のスクランブル交差点でした。その日、比呂志はスカウトで、いつものこの交差点に立っていたのです。

芸能プロダクションにとってスカウトは命、次々に新しい人材を生み出して行かないと厳し

い芸能界で生き残っていきません。オーエスプロも先代の社長の教え——全ての社員が一週間に一日はスカウトに出るように、を守ってきました。それは、単に人材確保と言うことだけでなく、街の人たちが、何に興味を持ち、何を楽しんでいるのか、時代の空気を肌で感じるという大切な仕事でもあるのです。さすが叩き上げでここまで来た先代社長の教えは大した物です、比呂志は今でも沖本慎一郎を尊敬しているのです。

人によってスカウトの方法は様々です。街角に立つ者、インディーズのイベントに顔を出す者、登下校時の学生から噂を聞き出す者、でも比呂志は必ず、スカウトはこの渋谷のハチ公前のスクランブル交差点と決めています。それは、比呂志ならではの、この場所で新しい逸材を見つけ出すノウハウがあるからです。

売れるタレントには必ず「オーラ」があります。言葉で上手く説明できる物ではないのですが、持って生まれた人間力、とでもいう物でしょうか。威圧感というが、吸引力というか、見ているだけで気圧されるような空気を放っているものなのです。化粧を落としてで、帽子を目深にかぶっていたとしても大女優というのは空気でわかってしまう、それと同じものです。

比呂志がかつて、これほどまでのオーラが出るのかと衝撃を受けたのが昭和の歌姫「大空ひばり」でした。その日、ビルの7階にあるスタジオで彼女の収録があったのです。スタッフ一同が、それぞれ忙しくスタンバイに飛び回る中、大空ひばりがビルの一階に到着した瞬間、「来た」とスタジオにいる殆どの人が気付いたのです。もちろん、何か連絡が入ったわけではありません、ただ「わかった」のです。「今、到着したな」と一同が目を合わせた2分後に、エレベーターのドアが開いて歌姫が入ってきたのです。そのドアが開いた瞬間に突風のようにオーラが吹き出したのはもちろんですが、ビルの1階に到着しただけで、7階まで感じさせるオーラを持つとは驚きの一言でした。芸能界で10年間仕事をしてきた比呂志ですが「大空ひばり」を越えるオーラは出逢ったことはありませんでした。ただ「明日香」は、彼女を越えるかもしれない物を持っていると、その日、比呂志は感じたのです。

渋谷のスクランブル交差点は、いつものように雑踏に埋め尽くされています。この日本一人通りが激しい交差点、渡りきるまでの91.5メートルに比呂志の特別なオーラ判定法があるのです。それは何も難しいことではないのですが、この子

は素質があるかもしれないと見込んだ者が「渡りきるまでに何人の人が振り返るか」をカウントするだけです。芸人でも、女優でも、歌手でも、モデルでも一緒です、オーラを噴出している人には、人は自然と振り返って見てしまうものなのです。2～3人でも振り返れば大したものですが、相当なオーラが出ていると判断して良いでしょう。そして、この交差点でのレコードホルダーが、今をときめく「ミッドタウン」でした。まだ素人だった彼らですが、明らかに普通の若者ではない輝きを持っていました。女性を中心に振り返った人数は実に12人、その場で比呂志がスカウトして、あれよあれよとトップスターに上り詰めたのです。今ではスカウトの世界での伝説です。この12人は破られる事はないだろうと思われた大記録です。明日香と出会うまでは。

その日、109側からハチ公側を臨んでいた比呂志ですが、後ろから何やらただ者ならぬ気配が近づいてくるのを感じたのです。これは、先代の教えを守り、毎週1回、10年間、一度も休まず街角にスカウトに立ち続けた者のみを感じることの出来る感覚です。

振り返ると、居ました。この気配の元が、すぐわかりました。それは一見は普通の女子高生でし

た。学生服を着て、化粧っ毛もなく、長いストレートの髪を一本に束ねている愛想もない女の子でした。身長も高くなく、プロポーションも普通でした。しかし、その目があまりにも普通ではありませんでした。まるでこの渋谷の街中で、野生の豹に出逢ったような衝撃でした。背筋が少し寒くなりました。あれほど力のある瞳は、今までお目にかかったことはありません。そして、彼女は明らかに街の風景から浮き上がっていました。何か、彼女の体自体が透明な膜に包まれているような、本当に地面から数センチ、足の裏が浮き上がっているような感じです。

もしかしたら、新記録が生まれるかもしれない。直感し、彼女がスクランブル交差点を渡るのを、そっと尾行しました。そして、驚くべき事が起きたのです。振り返るのです。すれ違う誰もが振り返るのです。男性はもちろんのこと、女性もほぼ同数振り返ります。男性だけ、女性だけではダメなのです、両性が振り返ってこそ、本当の逸材といえるのです。それにしても道行く人々、みんな振り返るのは不思議な感覚です。彼女はいつものことなので慣れっこなのでしょうが、彼女の後ろをついて歩く比呂志には驚きの連続でした。やはり自分のような凡人には、計り知れない求心力を

持つ人がいるのだと痛感したのです。記録が大幅に更新されました。なんと、振り返った人数38人です、横断歩道91.5メートルの中で、すれ違ったほぼ全員でした。この千載一遇のチャンスを逃してはいけない、比呂志の全細胞が叫んでいました。

「すみません、怪しい者ではありません」

オーエスプロの名刺を差し出ししながら、胸の高鳴りを押さえ比呂志は、彼女の前に立ちました。

彼女と目が合います。思わず心臓が締め付けられるような感覚です。普通の女子高生の前に立っているだけなのに、まるでヤクザの親分の前に立っているような気分です。それだけ鋭い眼光です。決して威圧や恐怖を宿しているわけではありません、あくまで澄んでいるのですが、なにか尋常でない物を湛えている瞳でした。底が知れない目でした。比呂志は、真っ直ぐに自分の脳の中まで見透かされているような気分でした。

「どうか話を聞いてください」

気付いたら比呂志は、思わず土下座をしていました。計算でそうしたわけではなく、その眼光の力に、そしてどんな事をしてもこの子をスカウトしたいという気持ちがそうさせたのです。

午後の雑踏、行き交う人たち、一人の女子高生

の前に土下座している中年男……比呂志は後悔しました。どう考えてもこのシチュエーションは奇妙です、怖がらせて、悲鳴を上げさせ、逃げていかせるのに十分です。しかし、彼女は比呂志の予想を遙かに超えた態度を取ったのです。

「まったく……さあ話聞きますよ」

なんと彼女は比呂志の肩を持って、優しく立たせたのです。

普通、女子高生といったら何をやるにも、面倒くさい、うざったい、そうでないとしたら、関係ない、気持ち悪い、です。しかし彼女は、渋谷の街中で見知らぬオヤジに土下座されて、平然とそして、優しささえ持ってその肩に手を置いたのです。なんという器の大きさ、比呂志は感動を覚えました。

タレントとして大成するひとつの大切な要素は「どんな場面でも物怖じしない」です。急に何かするように振られたり、大きな役に抜擢されたりした時に、恥ずかしがったり、疑問を感じたり、躊躇したり、萎縮したり、恐怖したり、プレッシャーを感じたりしないで堂々とやりきること、これがスターになるには大変重要なのです。例え上手いかななくても、それは良いのです、何より「すぐに堂々とやる」のがスターなのです。正に、こ

きく開花させようとしたのです。

テレビ番組のアシスタントから、大勢のタレントと番組に出演する雑壇ゲスト、どこへ出しても明日香は満足のいく仕事をやり遂げました。

——お疲れ様。また、今度一緒にやろうね。

すべてのスタッフが笑顔で声をかけてくれました。テレビ局スタッフの中に、明日香のファンクラブが結成されてたという話もあちこちから耳に入りました。オーエスプロの社内でも、タレントの審美眼に長けた社員達には、やはり明日香の才能は輝いて写ったようです。グラビアの仕事はもちろん、オーエスプロがあまり得意でないモデルの仕事も次々と舞い込みました。そして、第二芸能部からもまだ脇役ですが女優の仕事も来るようになったのです。そして、比呂志は、やはり明日香の将来は、バラエティーではなく、女優として進ませた方が彼女が大きく羽ばたくと結論を出しかけていたところでした。

ここ半年ほどは、様々な劇団のワークショップにも参加させてきました。本公演とは別の、演劇の練習会のようなものです。テレビドラマに次々出すより、まずは舞台演劇でその基礎を固めてやりたいと考えたからです。テレビドラマというのは、主演級はまだしも、いえ主演級にも実は何人

かはいるのですが、全体的に素人に毛が生えたような演技力でもなんとかこなってしまうものなのです。消費文化だからでしょうか、放送に間に合わせるため、予算内に収めるため、突き詰めた演技でなくてもOKを出して行かなくてはならない面があるのです。しかし将来、後世に残る大きな仕事をするためには、本当の女優と呼ばれるためには、やはり基礎から固めた演技の勉強が必要なのです。それは、単に演劇のスキルを学ぶという表面的なことではなく、明日香の感性に色々な舞台演出家の演出論を触れさせ、良い化学反応が出るのを期待してでもあるのです。

舞台演劇、特にあまり商業主義でない劇団は、良きにつけ悪きにつけ演技を突き詰めるしかないのです。戯曲家も、演出家も、劇団員も四六時中、演技のことを考えています。その情熱は大したものです。客が来なくてもいい、理解してもらおうなんて考えていない、そこまで自分たちを追い詰めている劇団もあるくらいです。芸能プロダクションの社員である比呂志は、そこまでは賛同できないものの、その姿勢や、演技論には、明日香の心に響くものがあると感じているのです。

しかし、このワークショップ参加には問題点もあります。それは参加費です。大概1週間程度の

ワークショップに5万円ほどの費用をとられます。それが劇団の活動費にもなるので仕方ない世界なのです。そして、ワークショップで演出家の目にとまり、本公演出演となってもノーギャラです。いえ、ギャラの代わりに本公演のチケットを50枚から、100枚ほど渡されるのです。これを売って自分のギャラにしてください、ということなのです。もちろん、心ある知り合いの何人かは買ってくれますが、結局はタダでばらまくことになります。劇団員は出演しても実入りはない、でも客が見てくれるなら満足しなくてはならない、とあまりよろしくないスパイラルがかかることになるのです。

この件について比呂志が社長室に呼び出されたのが2週間前でした。

沖本ビルの最上階にある社長室。濃褐色に光るマホガニーのデスク、濡れたようなラムスキンを張られたプレジデントチェア、その後ろには、アメリカの名門大学を卒業した証であるアカデミックドレスに身を包み誇らしげに笑う社長の写真、そして後光のように威厳を放つMBAの取得賞です。

そして隙のないシャネルのスーツに身を包み、日、英、仏、中、4カ国語を操る美人秘書です。

ちなみに、社長がどこからか連れてきたその秘書は、オーエスプロの正規入社試験は免除で採用され、しかも月給は、芸能生活35年の第一制作部長山田と同額という噂も囁かれる社長の懐刀です。これらの雰囲気为一体となってこの部屋に威圧感を演出し、入る者を従順にならざるを得ない気分させるのです。

たった3年前に入社した2才年上の社長の前で、10年間身を粉にして会社に、そして芸能の道に尽くした比呂志は、職員室に呼び出された小学生のように小さくなっています。

「この支出の欄の『参加費』というのはなんですか？」

社長のノーフレームの眼鏡が太陽を反射して光ります。

「それはですね、舞台演劇の世界では通例なのですが、ワークショップといいまして、芝居の練習の授業料のようなものです」

「勅使河原さん、貴方は何を考えているのですか？」

光る眼鏡で社長の眼が直に見えず心理は読み取れませんが、それはまるで大きな瞳孔から放たれたような光線のように、比呂志を責めている雰囲気なのは明らかです。

「うちの所属のタレントが、お金を稼ぐのではなく、払っているということですか？」

「はい、勉強ですので……」

「なるほど、勉強、ですか……」

比呂志はいい機会かもしれないと勇気も持って一言つけ足すことにしました。社長は芸能に関して、利益率などという言葉を持ち出して、いつもドライに考え過ぎる傾向があるのが気になっていたからです。

「芸事は神様の恵み——。先代の社長の言葉です。先代は芸能は農業と同じとよく仰っていました。時間をかけて、愛情を注いで、丹精に育て、やっと美しく実る。収穫はその御褒美、育てることに最大の喜びを感じないといけないと」

そっと眼鏡を外した社長は目頭を押さえます。父親の言葉が心に響いたのでしょうか？

「わかりました。どれだけの時間がかかって、どれだけの収穫があるかわからないものを育てるのが芸能だと仰るのですね。結構です。では好きなだけ勉強させてください」

比呂志の言葉が、経営マシンのような社長に、本当の芸能の醍醐味を伝えたのでしょうか、比呂志は期待を持って次の言葉を待ちます。

「しかしその授業料と、浪費する時間で明日香ク

ラスのタレントが稼ぐはずのギャラ、それを勅使河原さんの給料から天引きさせてもらいます。さかのぼって先月から」

言い切って社長は軽く肩で息をつき、手の甲をこちらに向け振っています。それが退室を促す動作であると気付くまでに、比呂志は少し時間を要してしまいました。

社長の考えは微塵も揺らいでいないようです。比呂志の後ろでは、バイリンガルの美人秘書がドアを開いて微笑んでいます。彼女の横を通り過ぎるとき、香った高級な香水の匂いと、耳元でかけられたネイティブな「チャオ」の言葉が、比呂志の脳裏に敗北感と共にいつまでも残っていました。

「だから、あの芝居は絶対にやります」

明日香と社長の睨み合いは続いています。第一制作部、第二制作部、フロアにいる全員が立ち上がって事の成り行きを見守っています。社長派の「誠也チルドレン」は、この跳ねっ返りのバカ女が、という冷淡な眼で、山田部長を中心とする古参組は、言ってやれ明日香、という期待の眼で見つめています。

魔力を秘めていると言っても過言でない明日

香の目に見据えられても、社長は逸らすことなく真っ直ぐに鋭い眼光をぶつけています。二人の間の空気が歪むような気のぶつかり合いです。

「あの演出家は凄いです。もう少しでなにかがつかめます」

「なにかとは？」

「言葉では表現できないものです。演技の本質です。くだらないテレビ番組に出演している時間の方が無駄です」

「ほう、その無駄をかき集めて生活させてもらっているのは誰だっ」

社長の鋭い語気にフロアの空気が震えます。。

「私はお金のためになんかやっていません」

明日香も負けていません。

「だったらなんのためだ？」

明日香が返答に詰まります。

「なのためだっ」

社長が詰めます。

どう答えて良いのか、明日香の言葉は止まったままです。まだ19才の少女が、自分はなぜ芸能活動をしているのか、一言で言い表すことは難しいのかもしれない。夢のため、情熱のため、自己表現のため、両親のため、ファンのため、愛のため……色々な熱い思考が、ない交ぜになって彼

女の頭の中を巡っていることでしょう。

「だから、なんのためだっ、このクソガキ！」

社長が壁を思いきり叩きます。その音に圧されるように。思わず口をついて明日香が発した一言が問題でした。

「勅使河原さんのためです」

部内全員の顔が、弾かれたように自分に注がれるのを、比呂志はスローモーションで確認しました。

「俺？」

まるで自分の物でないような、甲高い声が喉から溢れます。比呂志の心拍は、小学生の頃に野良犬の群れに囲まれたときと同じくらい踊り始めています。

「どういう事なんだ勅使河原」

「いや、社長それは」

「だって勅使河原さんが私にタレントになれって、渋谷の交差点で土下座して頼むから」

とにかくなんとかしないと……この騒動の爆心地である社長と明日香の元に、もつれる足をデスクに、椅子にぶつけながら比呂志は進みます。進む度に、ガシャン、ドスンと同僚のデスクから物が落ちていきます。

「お前が甘やかすから」

「そんなことは、なあ？」

すがる口調で明日香を見ると、目で「ゴメン」と言っています。本当に思わず口から出た言い訳だったようです。しかし比呂志には、この場を収める方法が思いつきません。

「ちゃんと説明しろ、なんでこんな馬鹿を雇ってるんだ？」

「バカって事はないでしょ、このインテリ眼鏡」

「やめろ明日香」

社長の売り言葉に、明日香の買い言葉、比呂志が止めても納まる様子はありません。

「お前誰に向かって」

「インテリめ～が～ね～」

「このガキ」

社長が明日香に掴みかかろうとします。

間に入って止める比呂志。

中指を立てて「ファック」の明日香。

混乱、騒動、怒号、そこに！

♪あんまりソワソワしないで～ あなたはいつでもキョロキョロ～ よそ見をするのはやめてよ～ 私が誰よりいちばん、好きよ、好きよ、好きよ～♪

最悪の着信メロディーです。

比呂志の携帯は、いついかなる時でもこの番号

だけは着信しないといけません。少し細かい話になりますが、比呂志にはマナーモードは許されません。マナーモードでは、決して取り逃してはいけないこの番号からの着信に気付かない恐れがあるからです。ですから、マナーモードにはせず全ての着信をサイレントモードにして、この番号だけを生かすという面倒な操作を常にしているのです。でも、このくらいの操作は、あの悪夢に比べたら苦にもなりません。かつて、この番号からの着信に番組収録立ち会い中で気付かなかったために、友人から同僚まで全ての携帯に搜索の電話を入れられ恥をかくと共に、なぜ電話に出なかったのか、なにか出られないような後ろめたいことをしていたのではないかと1週間問い詰められ続けたことがあるのです。ですから、社長と明日香がバトルを繰り広げるこの緊急状態でも、この電話だけは出ないわけにはいかないのです。

テレビ電話着信中の画面には「世界でいちばん愛する鏡子さま」の表示。ただの「鏡子」ではいけないのです、「世界でいちばん愛する鏡子さま」と入力させられ、電話を取る前に、この画面を周囲に見せないといけないというルールなのです。いついかなる時でも、そこにいる人間に鏡子と比呂志の関係性を認知させるのが目的なようです。

妻、勅使河原鏡子、痛妻からの電話です。比呂志は社長と明日香に画面を見せ、緊張感を持って咳払いして通話ボタンを押します。

「どこにいるの？」

「会社です」

「はい、カメラ前に向けて……」

いつもの儀式です。

「はい、ゆっくり回って、ゆっくりよ」

カメラで周囲を写さないといけないのです。本当に言った場所にいるのか、周りに怪しい女はいないのかを、鏡子さまに確認していただかないといけないのです。

「どうも」

まず目の前に映った社長に、鏡子がなおざりの挨拶をします。社長も黙って会釈を返します。実は鏡子は独身時代に西麻布にある小さなバーでママをしており、そこは先代社長を始め、芸能界の有力者が夜な夜な集まる店だったのです。この店で鏡子は、「お酒を飲むときは誰であろうと肩書きは関係ない」で接し、泣く子も黙る芸能界の首領たちも、鏡子の前では肩の力を抜いて普通の親爺に戻るといふ、妙な関係を気付いていたのです。だから、MBA社長とはいえ一目置かざるを得ず、鏡子も比呂志が勤める会社の社長なのに、

いつも通りのぞんざいな態度を取るのです。本当に悪気はないのですが。

「はい、回って……」

カメラが、明日香を写します。明日香がチラッとだけ画面を見て、にこりともしない顔を向けます。比呂志には見えませんが画面の中の鏡子は、間違いなく爬虫類のような冷たい目で明日香を見ていることでしょう。これは仕事なのに、比呂志がスカウトして、担当として育てている明日香が気に入らないのです。フレームから明日香が消える瞬間、鏡子の小さな声が聞こえます。

「ブス」

明日香が、画面に向かって噛みつこうとします。比呂志は顔の前で手を合わせ、平身低頭で明日香をなだめます。ここで更に、鏡子と明日香が揉めだしたら、それこそ手がつけられません。

そして一周回って、なにもなかった表情でカメラを自分に向けます。

「な、会社だろ」

「そうね」

鏡子に納得してもらったようです。でも間違いなく比呂志が仕事に打ち込んでいる時間に電話をしてくるくらいですから、何か重要な話でもあるのでしょうか？

「で、どうしたの」

少し不安げに比呂志が聞くと、

「あ、帰りの牛乳と卵忘れてないよね」

「はい」

「それと、ペットフードも買ってきてね、いつもの」

「はい、わかりま」

言い切らぬうちに電話は切られます。帰りのお買い物の追加発注でした。亭主の仕事中は遠慮しようといった概念は、痛妻には完全に欠落しているのです。自分が思い立った時が伝える時なのです。いえ、もしかしたら、ペットフードの発注はいつでもよくて、比呂志が他の女といるという直感が働いたのかもしれない。相手は明日香でしたが。

「くだらん」

あれほど興奮していた社長が、毒気を抜かれたように引き上げていきます。一步も譲らない態度だった明日香も、口を尖らせて髪先を弄んでいるだけです。結局、收拾不能と思われた社長と明日香のバトルは、鏡子の電話一本で最悪の乱闘を避けることができ、結果的に納まったのです。

悪魔なのか、天使なのか、勅使河原鏡子、本当にただ者ではない痛妻です。

「あ～ら先生えお強い、もう一本行かれますか？」

煌びやかなドレスに身を包んだ夜の蝶が、腿をすり寄せながら、上目遣いに見つめます。鏡の前で何度も練習したであろうとっておきの驚き顔で見上げています。

「そうだな、じゃ同じ物かな」

滑るようなカシミヤの光沢を放つ上等なスーツ、高級外車が一台は買えるというトゥールビヨンの腕時計……人気小説家の假屋崎努が、普段テレビで見せる理知的な顔からは想像も出来ない、目尻を下げまくった笑顔で答えます。

「いいですねえ先生、行きましょう」

比呂志は笑顔を絶やさないようにしながら素早く頭の中で計算します。

(プラス3万円……)

最高級とは言えない普通のシャンパンで許してもらえているので文句は言えませんが、街の酒屋で買えば6千円ほどの酒が、3万円に化けるのは何度付き合っても馬鹿らしい気持ちになります。——今日は20万円までです。越えた分は給料か

ら天引きしますからね。

(この続きは、メルマガ登録すると無料で講読可能です！)
メルマガ登録はこちら：<http://www.adachimotoichi.com>